

戦時のなかの戦後、戦後のなかの戦時 ——浜口隆一の二つの建築評論をめぐって——¹⁾

岸 佑

1. はじめに

建築ジャーナリストの宮内嘉久は、終戦直後に建築学者の岸田日出刀 (1899-1966) が見せた無責任な「変節ぶり」を書いている。

キーチャンこと岸田日出刀教授がどんな話をするかという興味から、ぼくは「建築意匠」の最初の時間を聴きに出かけた。噂のとおり、太縁の黒眼鏡をかけた教授は、足早に教室に入ってくるなり、黙って白墨を手にとると DEMOCRACY と書き記した。そしてこちらを向くと、「これからの建築はだね、デモクラシーの建築だよ」と。岸田教授のその第一声を聞いた瞬間、ぼくは反射的に《ナチス独逸の建築》(相模書房 1943 年) という彼の著書を思い浮かべた。それについては何の釈明もなかった。つい昨日まで、ナチス礼賛とまでは行かなかったにせよ、大勢に便乗してものを言ってきた人間が、一夜あればこの様である²⁾。

宮内は、岸田が戦時下の言動に釈明も反省もないことを非難する。戦後日本では、建築家の丹下健三 (1913-2005) が、戦時下の言動について非難を受けてきた。丹下は、太平洋戦争開戦直後に行われた懸賞設計競技「大東亜建設記念营造計画」(1942) で、富士山の麓に戦死者を弔う施設を設ける「大東亜忠霊神域計画」を提出して一等を獲得、さらに終戦前最後の大きな懸賞設計競技となった「日泰文化会館設計競技」(1943) でも一等を獲得して、戦時下に建築家としての評価を確たるものとした。戦後の広島平和記念公園設計競技では、原爆ドームを象徴として扱う計画案を提出して再び一等を獲得する。戦時下で戦争を賛美し戦後に平和を賛美したとも受け取れる丹下の活躍は、多くの建築関係者にとって、岸田と同様の変わり身の早さを想起させるものだった³⁾。

建築評論家の浜口隆一 (1916-1995) は、この時期の丹下のデザインについて評論を発表して、丹下を評価した。浜口は、東京帝国大学で丹下と同級生であり、卒業後は大学院へ進学して岸田日出刀研究室に所属し、イタリア・ルネサンス建築を研究した。浜口は、1944 年に日泰文化会館設計競技の結果を踏まえた建築評論「日本国民建築様式の問題」を発表し、1947 年には『ヒューマニズムの建築——日本近代建築の反省と展望』を出版するなど、戦後日本を代表する建築評論家として知られた。

「日本国民建築様式の問題」(1944年)は、「1930年代に激しい論争を繰りひろげた『日本的なもの』をめぐる問題構制を総括」し⁴⁾、「明治末の国民様式論争以来の建築的言説の総括を意図」した⁵⁾、とされる。「日本国民にふさわしい建築様式とは何か」という問題を正面から捉えたこの評論は、幕末以来つづいた欧化と国粹の問題を建築から考察した終戦直前のテキストであり、近代日本を表すにふさわしい建物とはどのような形であるべきかという問題を考察した系譜の最後に位置付けられる。

終戦直後には、『ヒューマニズムの建築——日本近代建築の反省と展望』(1947年)を出版して戦前の反省を踏まえた戦後の建築のあり方を提起した。この本は、敗戦後の廃墟のなかで「明るい展望に満ちた書として感激をもって(中略)多くの建築家にむさぼるように読まれた」⁶⁾。それゆえ「戦後建築の出発点において、現在とは比較にならないくらい重さ」をもって戦後日本の建築が向かうべき理想像を示した⁷⁾。その理想像が当時の現実から乖離したものであったとしても、この本は、戦後日本の出発点に存在する建築理論のマイルストーンとして存在感を示している。『ヒューマニズムの建築』の出版によって浜口は、建築における「戦後民主主義の申し子であり、体现者」と評される論者になった⁸⁾。浜口自身は、戦時中に「国民建築様式という神がかりのようなものを書いて(中略)浜口は少しおかしいということをいわれていた」と戦時下での言動を省みている⁹⁾。

しかし、建築評論家の川添登は、浜口思想には戦時と戦後に連続性があることを指摘する¹⁰⁾。川添によれば、浜口のいう「国民」は戦後の「市民」と同義であり、その思想の根底にはヒューマニズムがあったという。川添の主張をそのまま受け取ると、浜口は戦時下においてすでにいわば「戦後民主主義」を先行していたことになる。それでは、戦時中に「神がかりのようなもの」を書いた、という浜口の発言はどのように受け取ればよいのか。浜口は、戦後も「神がかった」まま活動したのか。戦時中に「神がかりのようなもの」を書いた思考と「戦後民主主義」はどのような関係にあるのか。

本論文では、そのような観点から浜口が終戦前後に発表した二つの評論を連続的に捉え、時系列に沿って整理する事で、終戦を跨いだ浜口の建築理論がいかなる点で変化し、いかなる点で連続しているのかについて考察を試みる。

2.1. 「日本国民建築様式の問題」の概要

「日本国民建築様式の問題」は、『新建築』誌の1944年1月号、4月号、7・8月号、10月号の4回にわたって連載された。建築系の雑誌は1944年末以降、日本建築学会発行の『建築雑誌』のみとなり、その内容も時局の影響を受けて実用的な内容が中心となった。浜口のこの文章が、終戦前最後の建築評論だとされる理由のひとつである。浜口がこの評論を「新しき日本建築様式の樹立に最も真摯な努力」¹¹⁾をしている丹下健三と前川國男(1905-1986)に捧げていることからわかるように、この評論は直前に行われた「日泰文化会館懸賞設計競技」の結果を受けて執筆されている。

この設計競技は、1942年に結ばれた日泰文化協定に基づいてバンコクに日本文化会館を建設するために行われた¹²⁾。丹下健三と前川國男は、この設計競技でそれぞれ一等と二等に選ばれている。この設計競技は、「大東亜建設記念营造計画」（1942年）のような実現を前提としない設計競技ではなく、計画実施を前提とした終戦前最後の大きな設計競技であったが、戦況の悪化により計画そのものが中止となった¹³⁾。

この評論は、建築家に取り組んでいる「日本国民建築様式の樹立」という実践的課題に対して、建築学がどこまで理解し貢献しうるのかを見極めることを目的としていた。浜口によれば、建築は「作る立場」と「知る立場」に分かれる。建築学（知る立場）は建築の在り方を問うもので、建築家や技術的・工学的知識（作る立場）とは異なる。二つの立場は、船員と羅針盤のような関係にたとえられて、説明される。「作る立場」（船員）が建築の進む方向を決定し、「知る立場」（羅針盤）がその進路の意味を解する。つまり、「作る立場」である建築家——「日泰文化会館設計競技」での丹下と前川の提出案——が「日本国民建築様式の樹立」に向かう方向を選び、その方向がどういう意味を持つのかを、浜口が「知る立場」から読み解こうと試みたものだった。

浜口は、建築様式あるいは建築史の把握もまた「知る立場」と「作る立場」からなされてきたと論じて、前者をハインリッヒ・ヴェルフリン(1864-1945)に、後者をアロイス・リーグル(1858-1905)にそれぞれ代表させる。浜口の評論は「作る立場」の意図を理解することが目的なのだから、選ばれるのはリーグルの方法である。リーグルは、「芸術意欲」という概念を用いて芸術を作る立場の意図を読み解こうとするが、浜口はそれを建築にひきつけて「建築意欲」という概念を設定し、建築家が建築を作る意図を読み解こうとした。浜口は、建築書を引用しながら、西洋の「建築意欲」が、柱、石、比例、美的調和といった「物的なもの・構築的なもの」への傾倒にあるとする。対して日本の建築意欲は、柱と柱のあいだや庇の数を「何面何間」と記す間面記法に表されるように、「行為的なもの・空間的なもの」にあるとした¹⁴⁾。

浜口によれば、「日本国民建築様式の樹立」は「宿命的な巨きな課題」であり、日泰文化会館設計競技は其中でも重要な一コマだが、その入選案だけではなく審査員でさえも「物的なもの・構築的なもの」への傾倒が見られる、と難じる。「物的なもの・構築的なもの」を建築とする見方は、19世紀後半に日本へ移入された考えであって、本来的なものではない。重要なのは、建築を「物的なもの・構築的なもの」と「行為的なもの・空間的なもの」の統一体と捉えることである。そう考えると、例外的に「行為的なもの・空間的なもの」として建築を捉えている入選作品は、丹下と前川のもののみだった、と浜口はいう。丹下と前川それぞれの作品には、「行為的・空間的要素と構築的・物的要素の統一体としての建築において行為的・空間的要素に傾倒してゆこうとする意図」があり、「日本国民建築様式の問題は、われわれの作る建築の行為的・空間的要素の形成の仕方とその主たる場所を見出さなければならない」として、論はとじられている¹⁵⁾。

2.2. 「物的」 と 「空間的」

「物的・構築的」要素と「行為的・空間的」要素の統一体として建築を考えるという発想を、浜口は当時進めていた「建築意匠学的研究」から得たようだ。浜口は、生田勉(1912-1980)へその内容を書いている¹⁶⁾。「建築意匠学的研究」は全三部構成で、第一部の「建築意匠学の方法論」をもちいて、第二部でミケランジェロの建築を、第三部で19世紀後半から20世紀初めにかけての「発生期における近代建築」を取り扱うとする。

Michelangelo の建築はいわばもっとも körperlich [物的] なものであり他方はもっとも räumlich [空間的] なものを意図したのだと思います。建築の本質の許しうる限りにおいて、Michelangelo の建築はもっとも körperlich なものであり、他方発生期の近代建築は——Corbusier などの出現しない前です。たとえば [トニー・] ガルニエや [アンリ・] ヴァンデベルデ或いはもっと遡ってオットー・ワグナーもそうかもしれませんが。とにかく石の建築の崩壊期です。——もっとも räumlich なものを意図した、というよりはせざるをえなかった(略)と思います。この両極によって、或る程度建築の意匠というもの——したがって建築というもの——の本質的なものを捉えることができるのではないかという気がしています。([] は引用者補)¹⁷⁾

ミケランジェロの建築のなにが物的でなにが空間的なかはわからない。しかし、「日本国民建築様式の問題」で、浜口は建築を「行為的・空間的」要素と「構築的・物的」要素との何らかの統一体とみなしていた。西洋建築は、このうち「物的・構築的」要素が強く、日本建築は「行為的・空間的」要素が強いとする。浜口がミケランジェロの建築を説明するのに用いた「物的」と「空間的」という対比は、「日本国民建築様式の問題」で西洋と日本の文化的対立へと拡張されていた。

2.3. 日本近代建築の「世界史的立場」

浜口は、「日本国民建築様式の問題」の後に、今和次郎『暮らしと住居』(1944年)の書評として「住宅間取の史的類型論」という文章を書いている¹⁸⁾。そこで浜口は、建築とは「構築と間取」、「建て方と住まい方」が絡み合った統一体だと定義する。ここで「構築」・「建て方」および「間取」・「住まい方」と呼ばれているのは、「日本国民建築様式の問題」の「構築的・物的要素」と「行為的・空間的要素」と同じであり、これらの統一体が建築であると見なす点も共通している。

題名の「類型論」という用語に注目したい。ヨーロッパ建築における造形的特徴の対比を、西洋と日本という文化の対比として捉える発想は、八束はじめも指摘するように、京都学派の哲学者である高山岩男(1905-1993)による文化類型論¹⁹⁾の議論を思わせる。類型論は、個々の存在や現象の間の類似点を抽出して、それらの本質を理解しようとする学問の方

法で、類型学とも呼ばれる。日本でこの言葉を学術研究に用いたのは、高山が1939年に出版した『文化類型学』においてだとされる²⁰⁾。高山は、それぞれの民族精神の特性を把握するために、世界中の諸文化（ギリシア文化、インド文化、キリスト教文化、仏教文化、中国文化、西洋文化、そして日本文化）から文化的本質を抽出して、相互比較し、日本文化は各々の文化を選択的受容ないし転写的受容することで成立発展してきた、と論じた。なかでも西洋文化は、明治以降の日本にとって「深刻な対立意識なくして直接的に共存し得た」²¹⁾。西洋文化はやがて「直接的な共存を許さぬもの」になり「漸次日本的と西洋的との対立の自覚に進むに至った」²²⁾。高山の議論は、西洋中心主義、帝国主義、植民地支配の批判へ向かい、東西文化の吸収を可能にした日本文化の特質こそがそれを解決しうる、と結ぶ。

「日本国民建築様式の問題」において浜口は、西洋建築も「現代の日本の建築のなかにもあまりにも深く喰い入り、しかもやはり外なる」ものだと述べる²³⁾。その一方で浜口は、「構築的・物的」という西洋建築の特質と、「行為的・空間的」という日本建築の特質を、「建築を構成する二つの根本的要素」とみなし、「凡ての建築に通ずる根底的な類同性」だ、と考える²⁴⁾。建築を作る人間が二つの特質をどのように統一したかによって、西洋の建築と日本の建築の違いが生まれるのであり、「具体的な建築は歴史的・社会的な現実——民族・風土・時代など——によってそれぞれ特定の統一のされ方をして」差異が生まれる²⁵⁾。

2.4. 「日本国民建築様式」という地点

現代日本の建築は、「行為的・空間的」なものと「物的・構築的」なものの統一体でなければならず、その上で「行為的・空間的」要素を形成していかなければならない、という浜口の主張は、いわゆる近代の超克の議論と重なるところがある。しかし、「日本国民建築様式」における浜口のオリジナリティは、創作論と文化論を用いて、明快な理論的枠組みを用意したことにあると思われる。

浜口は、まず既存の建築史学を根本的に論難する。日本建築史学は、西洋建築史学の様式概念に基づいた分類が行われており、そこからみいだされる日本建築の伝統は「物的・構築的傾向」に偏る。「日本国民建築様式」の問題を、「作る立場」の「意図」から探ろうとする浜口には不満だった。浜口は、「作る立場」から過去の日本の建築を理解する、創作の立場から伝統を理解しようと試みる。学問的な方法論を建築の創作論へと転換させながら、浜口は、たとえ伝統的建築様式で設計しても、「作る立場」の「意図」があればよい、という論理を構築する。そのために、「建築意欲」という概念を設定し、過去の日本建築が「空間的・行為的」傾向をもっている、と主張した。

西洋と日本の建築的傾向に決定的な差異をもたらしたのは、浜口によれば、「石と木についての内在的な動かし難い宿命」であった²⁶⁾。木と石は、ここで建築の手段と目的の関係に重ねられつつ、日本と西洋の文化的比較を可能にする比喩としても用いられていた。

浜口の論考は、「日本」と「西洋」という理念的な文化対立へと向かうことで、「日本」と

「西洋」の統一体としての建築において、「日本」へ向かうという結論にたどりついた。文化的特質から帰納的に建築史を構成するという論理展開を生んだところに、戦時期における浜口の議論の特徴があったといえるだろう。

3.1. 『ヒューマニズムの建築』の概要

浜口は1945年8月に「空襲と赤紙を避けるため」開拓移民団の一員として北海道へ渡る途中で、終戦を知る²⁷⁾。8月15日は、青函連絡船の上だったという。浜口が東京へ戻ってきたのは、東京大学第二工学部（現東京大学生産技術研究所）の講師として着任した1947年4月であり、その年の12月に『ヒューマニズムの建築』が出版された。

『ヒューマニズムの建築』は、全四章で構成される。第一章では、戦前の反省の必要が説かれる。モダニズムの影響によって、建築界は「どちらかといえば保守的な見解をもつ建築家」と「若い進歩的な見解の人々」に二分された²⁸⁾。「若い進歩的な見解の人々」は、「『非日本的』といったかどで次第に圧迫され、正面から日本的建築様式に反対するということは反戦論となえることと同様になった」²⁹⁾。戦争の進展と国家主義の影響は、「日本的建築様式」の問題と記念建築に対する積極的機運を生んだ。しかし記念建築は、「強大な国家主義の建築的表現」として、「日本の近代建築の潮流に対して決定的な打撃」をあたえた³⁰⁾。終戦を経て自由になった今こそ、近代建築の本質を把握し、その歴史について厳しく反省する必要がある、と浜口は主張する。

第二章では、近代建築の本質を把握すべく、西欧社会の歴史的発展段階と近代建築との関係が論じられたのち、近代建築の本質が機能主義と人民と美であることが指摘される。原始氏族社会から社会が発展する過程で人間は、支配階級と被支配階級に分かれ、前者は神殿や宮殿といった「人間を越えた権威に捧げ」る記念建築的な「高級建築」を石でつくり、後者は「人間のために存在」し、住居や生産労働を支える「下級建築」を木でつくる³¹⁾。そして近代建築は、建築構造、^{フラン}平面に対する機能主義的態度、そして建築家の「下級建築」への進出によって生まれた。とくに建築家の下級建築への進出は、「神から人間を解放し、人間そのものの中に聖なるものを見出す」という人間性の解放につながる³²⁾。また機能主義は、様式主義とモニュメンタリズムに対する機能の優位、もしくは目的に対する手段の優位を主張し、「行為・機能を通じて、人間そのものをもっとも高い目的の位置におく」がゆえに「人間それ自身を高めようとする」³³⁾。それゆえ、人間のための建築である近代建築はヒューマニズムの建築であらねばならない。

第三章では、上記のような近代建築の本質をふまえて、日本近代建築の反省的理解が示される。日本の近代建築の潮流は「主として高級建築」にあったため、「不自然」で「歪んだもの」になった³⁴⁾。人間のためにつくられる機能に忠実な近代建築は「国籍を超えて類似する」国際性を有するが、日本ではスタイルとして受容したために「人民から遊離してしまった」³⁵⁾。戦時期に「日本的な建築」とモニュメンタリズムの問題が表出した原因は、この矛

盾にある。例えばモニュメントは、人間を超えた権威へ訴えるために機能以上のものが求められ、近代建築とは相容れない。しかし、日本の近代建築家たちはモニュメンタリズムと関わったことで、「近代建築家としての資格」を失ってしまった。このことを反省しなければならない³⁶⁾。

第四章では、以上のような理解と反省をふまえて、戦後日本の建築の進路が示される。それは、第一に人民のものであろうとすること、第二に機能主義によって制作すること、第三に高度の技術的水準をもつこと、そして第四に美しい作品であること、の四つである。これらを成し遂げるためには、(1) 極度に低下した日本の社会的生産力の向上と、(2) 低下した日本の人民の生活水準の向上が欠かせない。具体的には、住宅と公共建築である。住宅については、(A) 最小限住宅の問題と (B) 住宅の工業生産の問題が課題としてあり、公共建築については、機能主義を通じたモニュメンタリズムと美的水準の達成が要求される。

浜口は次のように文を結んでいる。「近代建築が人民の建築であり、人間のための建築であり、ヒューマンイズムの建築であること、そしてそれは機能主義を誠実に貫徹することによってのみ果たされること——この根本信条だけはいかなる場合にも放棄されてはならぬのである」³⁷⁾。

3.2. 『ヒューマンイズムの建築』批判

『ヒューマンイズムの建築』刊行と前後して、近代建築の概念規定をめぐる論争（「近代建築論争」）が展開された。近代建築とは機能主義と美の建築であり人民の建築である、という浜口の主張に対し³⁸⁾、いわゆる非転向のマルクス主義者である図師嘉彦 (1904–1981) の批判³⁹⁾、そして住宅問題に戦前から関わってきた西山卯三 (1911–1994) の批判がでる⁴⁰⁾。これらの批判は、マルクス主義の立場から近代建築と下部構造との関わりを問うもので、浜口の主張が「けっして現実を突破し得ないこと、それがむしろ、危険な役割をになうこと」が繰り返されていた⁴¹⁾。これに建築家の佐藤三郎 (1896–1974) と建築評論家の神代雄一郎 (1922–2000) が加わり⁴²⁾、1948年11月には日本大学で学生を含む150人以上が出席して『ヒューマンイズムの建築』をめぐる討論会が開催され、近代建築論争はピークを迎えた⁴³⁾。

美について言及した浜口の近代建築の概念が、資本主義社会における下部構造を無視した観念的なものに過ぎないという批判は、生産性のある議論を生み出したわけでない⁴⁴⁾。資本主義社会における建築の役割を生産の問題と捉えて批判する視点は、戦前の労働運動の反復にとどまるものだったが、浜口のいう近代建築は建築生産の問題を美学の問題としても捉えていた。

『ヒューマンイズムの建築』において、機能主義と人民と美という三つの要素は、近代建築を成立させるいわば三位一体であった。浜口にとって、近代建築は人間または人民のための建築だった。だからこそ、機能主義は近代建築を実現する手段でなければならない。もし近代建築が機能主義を目的とするなら、近代建築の機能主義は「人間を超えた権威」となり、

神殿や宮殿などのモニュメンタリズムと結びつくことになってしまう。ゆえに、機能主義が近代建築の目的となってはならない。

さらに近代建築は美しくあるべきだ、と浜口は主張する。古代ローマのウィトルウィウスが建築を用・強・美から成り立つものと規定し、ルネサンス期の建築家たちがウィトルウィウスに注目して以来、これら三つを満たすものが建築であると考えられてきた。それぞれ、機能性（用）、耐久性（強）、芸術性（美）と言い換えることができるだろう。イタリア・ルネサンスを研究していた浜口も当然ながらこのことを知っていたと思われる。近代建築が美しくなければいけないことは、浜口にとっていわば暗黙の了解だった。

だからこそ、『ヒューマニズムの建築』のなかで、機能主義と美はともに制作に関する倫理的な態度のあり方として論じられていた。浜口は、機能主義と美は矛盾しないものの、機能主義をつきつめることは美と無関係だとする。機能主義を突き詰めることで近代建築が人民の建築になるのなら、近代建築にとって美とはいかなる意味があるのか。浜口は、そのことを明確に論じていなかった⁴⁵⁾。

4. 文化的本質としての「石」と「木」

「日本国民建築様式の問題」と『ヒューマニズムの建築』には、建築材料である「石」と「木」をめぐる記述がある。この二つの論考を連続的に捉えるため、この記述に注目したい。これらは、「日本国民建築様式の問題」において、それぞれ西洋建築と日本建築を代表し、建築の国民性や風土性を表すメタファーと理解される。「石」や「木」は、「西洋」と「日本」の文化的本質を表す要素として用いられていた。

浜口によれば、「内在的な動かし難い宿命」が石と木にはあり、「それぞれ人間に対する関係の性質はやがて重要な結果となって現れてくる」⁴⁶⁾。ピラミッドを想像するとわかりやすいだろう。巨大な石を運び、それを積み上げるためには「人間の努力を非常に多く必要とする」。ゆえに「石」は「人間の努力を多量に吸収」し、建築の構築的要素となる⁴⁷⁾。積みあげられた建築は「人間の努力の膨大な量を吸収することによって偉大なものとなり、作った人間を超えて究極のものにまで高まってゆく」ため、「人間そのものの位置よりも遥かに高い」価値をもつ⁴⁸⁾。それゆえ構築する行為自体が建築の目的となり、西洋の建築はモニュメンタルな性格をもつ。それに対して、「木」はどうか。

軽い柔らかい朽ち易い「木」による構築的要素は人間の努力を容れるのには自ら限度があり、「石」のように無制限に容れることによって人間を超えて究極の目的として高まるということとはできない。それはどうしても手段の位置に止まらなければならないのである。かくして、そのような建築が価値高いものとして人間を超えて高まるとしたならば、それはこのような構築的なものを手段として、そこに生みだされる空間的なものによってでなければならない⁴⁹⁾。

「石」の建築が構築を目的とするために「物体的」となるのに対し、「木」の建築は構築の手段にとどまるため「空間的」となる、というのが浜口の理解であった。「住宅間取の史的類型論」における建築の捉え方も加えると、この一連の「石」と「木」をめぐる浜口の議論は、

西洋：「石」＝「物体的・構築的」＝「目的」＝「建て方」（構築）

日本：「木」＝「行為的・空間的」＝「手段」＝「住まい方」（間取）

と表わせるだろう。

戦後の『ヒューマニズムの建築』では、この「石」と「木」の対立が階級対立の図式へと転換される。「支配階級」の建築は神殿や宮殿といったモニュメンタルな性格を持ち、「柱は太く高く、のしかかり、また崇高に聳える」が、「人間を超えた権威に捧げられた大建築はどうしても、このような石材で作られなければならなかった」⁵⁰⁾。石材が高貴で貴重な材料だったからである。

石材の重々しい量感と厳めしい質感とは、建築を荘重なものに見せ、壮大な石造の記念建築は人間の心の上に重々しくのしかかる⁵¹⁾。

「日本国民建築様式の問題」で浜口が、「石」の建築は「作った人間を超えて究極のもの」へ向かうモニュメンタルな性格を持つ、と論じていたことが繰り返されている。それに対して、「被支配階級」の建築すなわち人民の建築は、木材で作られ続ける。しかし近代に入ると、建築材料の変化、建築構造および機能主義的態度の登場により、階級により異なっていた建材の使用に変化が生まれた。支配階級の建築家たちは被支配階級の建築へ関心をもち、被支配階級の建築がモダニズムの範例となった。

支配階級が被支配階級を参考にするという立場の逆転は、「石」の「木」に対する優位の逆転ともとれる。鉄やガラスといった新しい建築材料の登場が影響を与えたと論じられているので、これを単純に「石」と「木」の対立と捉えることはできない（鉄もガラスも「石」だということは可能かもしれない）。「支配階級」と「被支配階級」は近代建築を共有している、とも読める。

「日本国民建築様式の問題」と『ヒューマニズムの建築』を連続的に捉えてみると、浜口は、共通した枠組みによって議論を構築していることがわかる。まとめれば次のようになる。

物体的・構築的＝西洋＝「石」＝支配階級＝機能主義＝美＝目的

行為的・空間的＝日本＝「木」＝被支配階級＝機能主義＝美＝手段

建築論を通して西洋と日本が支配と非支配という対立項と重ねあわされている。そこからの解放や超克が戦時期に叫ばれたとしたら、それが戦後の浜口の論考にも反復されていることは興味深い。戦後になってその図式に加えられているのは、美と機能主義という要素だが、前述したように、美と機能主義の関係は明確にされないままであった。

5. おわりに

浜口や丹下による戦時下での言動や苦闘が、戦後との関係で興味深い問題となりうるのは、それが1942年に行われた「近代の超克」会議の議論と関わるからである。竹内好は、「近代の超克」の議論が「日本近代化のアポリア（難関）の凝縮」だと述べた⁵²⁾。それは、「復古と維新、尊王と攘夷、鎖国と開国、国粹と文明開化、東洋と西洋という伝統の基本軸における対抗関係が（中略）一挙に問題として爆発した」ものである⁵³⁾。竹内は、その思想的系譜を雑誌『文学界』グループ、京都学派、そして日本浪漫派とりわけ保田與重郎の三つに分けている⁵⁴⁾。そして竹内は、日本浪漫派のイロニーの問題が戦後に未解決のまま引き継がれたと指摘した。

ケヴィン・マイケル・ドークは、戦後の近代批判言説が戦時下の「近代の超克」の議論と共通すると述べた。そしてドークは、戦後にも花田清輝(1909-1974)による竹内への批判を通して、両者の間にある、近代とアジアをめぐる認識の差を指摘している⁵⁵⁾。

ハリー・ハルトゥーニアンは「近代の超克」会議における、古典への回帰や西洋の否定といったものが、無時間的で静的で不変な共同体（彼の言葉では社会体 the Social）への参照を前提としている、と指摘した⁵⁶⁾。ハルトゥーニアンによれば、それは1920年代および1930年代の知識人たちが抱く、ある危機感に由来していた。それは、戦間期の日本の都市の日常が絶え間ない変化にさらされていたこと、その変化が農村にまで波及したことによって、それまで存在していた何かが決定的に失われてしまうことへの危機感であった。ハルトゥーニアンは、失われていくものを保持するために、知識人たちは古典への回帰や日常の経験、風土性に着目した、と論じる。

このハルトゥーニアンの指摘は、本論文で取り上げた浜口の論考にも当てはまるように思われる。「日本国民建築様式の問題」において、建築意欲の表出を示すものとして浜口が引用するのは、寝殿造をはじめとする寺社仏閣であり、『徒然草』や鴨長明といった古典文学であり、その議論の土台には建物が「木」であるという風土性があった。「日本建築の全体像を貫く基本的な傾向」とは、静的な日常や不変の生活から導き出される、無時間的な共同体の特徴にほかならない。

木造の建築は日本に限らずアジアの広範囲に見られるが、浜口のテキストでその言及はない。1930年代に日本の建築家たちは、神社・茶室・数寄屋へ着目しその再評価を行うが、その背景には、「中国」からの影響を受けない建築を模索する、という動機があった。しかしいわば大陸との比較を通して「日本」を設定するという態度も、浜口のテキストには見ら

れない。

浜口の二つの論文は、静的かつ不変で無時間的な「西洋」と「日本」とを対立的に捉えて、その統一体である近代建築によって、近代を超克しようとしていたのである。

註

- 1) 本稿は2014年3月に国際基督教大学大学院に提出した博士論文『「貫戦」期日本におけるモダニズム建築の言説・表象・実践』の第四章を加筆修正したものである。
- 2) 宮内嘉久『建築ジャーナリズム無頼』晶文社、1994年、30-31頁。
- 3) 戦時下における建築家の言動については、井上章一『アート・キツチュ・ジャパネスク』青土社、1987年が詳細に記している。井上は、建築家の戦争責任が丹下一人に帰されるものではないこと、むしろ戦後に活躍したモダニズムの建築家たちも戦争には肯定的であったことなどを明らかにしている。
- 4) 磯崎新『建築における「日本的なもの」』新潮社、2003年、27頁。
- 5) 八束はじめ『思想としての日本近代建築』岩波書店、2005年、513頁。
- 6) 浜口隆一『再刊 ヒューマニズムの建築』建築ジャーナル、1995年、178頁。
- 7) 布野修司『戦後建築の終焉』れんが書房新社、1995年、121頁。
- 8) 川添登『序文 市民社会のデザインの倫理と論理』浜口隆一『市民社会のデザイン』而立書房、1998年、6頁。
- 9) 浜口発言、「創立70周年記念座談会（デザイン）」『建築雑誌』1956年4月号、11頁。
- 10) 川添、前掲書。
- 11) 浜口、前掲書、1998年、19頁。
- 12) 審査委員会は以下の通り。委員長は伊東忠太、建築界から内田祥三、大熊喜邦、岸田日出刀、小林政一、佐藤武夫、平山^{たかし}嵩の6人、外部から香取秀真、小杉^{ゆきひろ}放庵、安田^{ゆきひろ}毅彦、横山大観、田村剛、山本熊一、柳澤健の7人。
- 13) 柳澤健『泰国と日本文化』不二書房、1943年、加納寛「1942年日泰文化協定をめぐる文化交流と文化政策」『愛知大学国際問題研究所紀要』第115号、2001年、市川健二郎「日泰文化協定をめぐる異文化摩擦」『大正大学研究紀要』第79号、1994年。
- 14) 浜口、前掲書、1998年、104頁。
- 15) 同上、142-147頁。
- 16) 同上、389頁。
- 17) 同上。
- 18) 浜口隆一「住宅間取の史的類型論」『新建築』1944年12月号。
- 19) 八束、前掲書、513頁。
- 20) 「高山岩男略年譜」斎藤義一編『京都哲学撰書15 高山岩男「文化類型学・呼応の原理」』燈影舎、2001年。この年譜によれば、高山はこの著作に先立ち、1933年に「文化類型学」の概念」という講義をおこなっている。日米戦争開戦時の「世界史的使命」や「近代の超克」論の文脈で引用されることが多い高山だが、終戦直後に出版した『文化国家の理念』（1946年）の土台となる論考は1944年の段階で著しており、思想的立場に推移がみられるようである。詳しくは、福岡寛之「敗戦前後の高山岩男」『福岡大学人文論叢』第43巻第3号、2011年を参照。
- 21) 高山岩男「文化類型学」、斎藤、前掲書、164頁。

- 22) 同上。
- 23) 浜口、前掲書、1998 年、54 頁。
- 24) 浜口隆一「日本国民建築様式の問題」『新建築』1944 年 10 月号、270 頁。
- 25) 同上。
- 26) 同上、115 頁。
- 27) 浜口、前掲書、1998 年、390 頁。「日本国民建築様式の問題」では応召のため執筆を切り上げた
と書いていたが、八束はじめは、浜口は応召されたが実際は出征していないと指摘している（八
束、前掲書）。
- 28) 浜口、前掲書、1995 年、6 頁。
- 29) 同上、9 頁。
- 30) 同上、11 頁。
- 31) 同上、29-33 頁。
- 32) 同上、54-56 頁。
- 33) 同上、60 頁。
- 34) 同上、82 頁。
- 35) 同上、87 頁。
- 36) 同上、118 頁。
- 37) 同上、176 頁。
- 38) 浜口隆一「人民の建築としての近代建築」『建築新聞』第 1 号、1947 年 9 月 10 日。
- 39) 図師嘉彦「近代建築の理解における浜口氏の誤謬について」『建築新聞』第 2 号、1947 年 11 月
1 日、「近代建築の理解のために」『建築新聞』第 3 号、1948 年 5 月 1 日、「建築理論以前」『新
建築』1948 年 10 月号。
- 40) 西山卯三「書評」『建築雑誌』日本建築学会、1948 年 3 月号。
- 41) 布野、前掲書、132 頁。
- 42) 佐藤三郎「建築技術者の任務」『新建築』1948 年 2 月号・3 月号および「彷徨する建築技術者」
『新建築』1948 年 6 月号、神代雄一郎「近代建築研究の現代に於ける二つの課題」『新建築』
1948 年 6-8 月号。
- 43) 討論会の記録は、新日本建築家集団編『NAUM』第 2 号、1949 年に所収。抜粋は、村松貞次郎
『日本科学技術史大系 第 17 巻・建築技術』第一法規出版、1964 年に収録されている。
- 44) 神代雄一郎「近代建築の歴史的規定」『建築雑誌』日本建築学会、1948 年 9・10 月号。
- 45) そのため、この浜口の主張は 1960 年代になると、「美しきもののみ機能的である」という丹下
健三の主張によって、後から論理的に乗り越えられる限界点を孕んでいた。布野、前掲書、
126-127 頁を参照。
- 46) 浜口、前掲論文、1944 年、272-273 頁。
- 47) 同上。
- 48) 同上、273 頁。
- 49) 同上。
- 50) 浜口、前掲書、1995 年、29 頁。
- 51) 同上、31 頁。
- 52) 竹内好「近代の超克」『近代の超克』富山房百科文庫、1979 年、338 頁。
- 53) 同上。

- 54) 同上。松本健一が指摘するように、竹内はこのうち日本浪漫派の問題が戦後も未解決のまま引き継がれたと反省的に考えることで、「方法」としてのアジアへと辿り着いた（松本健一「解説」『近代の超克』富山房百科文庫、1979年）。日本近代建築のなかで、日本浪漫派との関わりが言及されるのは、丹下および立原道造（1914-1939）であるが、これについては稿を改めて考えてみたい。
- 55) ケヴィン・マイケル・ドーク著、小林宣子訳『日本浪漫派とナショナリズム』柏書房、1999年。
- 56) ハリー・ハルトゥーニアン著、梅森直之訳『近代による超克（上）』岩波書店、2007年。主に、第一章および第二章を参照。